【土木史研究　第16号　1996年6月　自由投稿論文】

広島市都市形成発祥の地における空間構造の変遷に関する研究

A Study On the Transison of Spatial Structure Where the Hiroshima City was born.

小谷 俊哉

by Toshiya Kotani

概　要

都市はその発生以来、様々な要因で当初の様相を変化させていく。特に都市形成発祥の地となった場所が都市の変遷過程の中で空間的にどのよう空間構造と位置づけで今日に至っているかについて検討を進めていくことは、今後の都心について考える時に重要である。本研究では広島の城郭内部の区域を事例として取りあげ、考察を行った。研究の結果、16世紀末の城下町築城以来の城郭構造を改変しながら、近代明治以降、終戦までの封建性の下での閉鎖的な空間から様々な変遷過程を経ながら徐々に開放的な空間へと変容していることが判明した。

1．緒言

戦後50年を経て様々な形で都市が成熟してきた今日の都市の中心や都心の様々な問題について考えるとき、どのような観点や範疇で考えるのかという問に最初にあたる。歴史的観点から将来の都市のあり方を考えるのであれば、まず都市が興った場所、つまり発祥の地はどこか、そして現在に至るまでどのように位置づけられ変容しきたかという疑問が生じる。近世城下町では城郭を基点として都市活動が展開されてきたと言え、特に市街地が拡大してきている現在において、改めて都市が興った発祥の地について考察を行う必要があると考える。そこで本研究では、城下町都市であり、様々な都市計画事業が展開されてきた広島を研究事例としてその空間構造の変遷について検討を進めることとする。

研究方法はこれまでになされた都市計画的事業を振り返りながら旧版地図や文献資料による経年的変化を重ね合わせることを中心に行うものとする。対象地区としては旧広島城郭があった外堀の内側とする。これは領地を治める居城を建設するために城郭が築かれ城下町が形成されていったという経緯から、都市の発祥の地として捉えるのに相応しいと考えたからである。現在の町名では基町・八丁堀・上八丁堀の全域及び西白島町・東白島町の南端部がこれに含まれる。特に旧城郭の大半を占める基町は、「広島開基の地」という意味に因んで1887(明治20)年に付けられた総称1）でもある。対象年代は、城郭の空構造が改変されていく過程を捉えることを主眼とすることから、城下町時代については概略的な構造を述べるにとどめ、主として明治の近代化以降、現在までとする。

2．広島城下町の建設

(1) 広島城の選地と城郭の構成

広島城下町の建設は、16世紀後半の戦国時代末期に安芸国を領有していた毛利輝元が山間の郡山城から海際の広い新たな居城を求めて1889(天正17)年に太田川河口にあった五ケ村に築城することを決めたことに始まる。この地を「広島」と命名し、1591(天正19)年に完成、入城するが、以後福島政則、浅野長屋が入城し明治まで浅野家が領主となった。

広島城の城郭は京都の聚楽第を模したと言われているが、本丸を中心に堀を三重に巡らせ、ほぼ1ｋｍ四方になり、城郭内部には三の丸、大手郭、北の丸、北

*　keyword：都心部、都市形成史、空間構造
**正会員　工修　（株）都市計画設計研究所
（〒160　東京都新宿区本塩町19番地AOIビル）

の郭、西の郭等を配している。[1] 外堀の境界部を現在の名称で述べると、東側の八丁堀と呼ばれていた人工的な堀は、白島通りに位置し、西側は本川（旧太田川）を外堀として天然の要害に利用し、南側は相生通り、北側はほぼ城北通りの位置にある。

(2) 城下町の構成

城下町は太田川（現本川）と京橋川に囲まれたデルタに城郭が築かれ、当時の海岸線からも城郭南端の外堀から約800mほどの近さにあった。

a）骨格軸について

城下町の基軸となった白神通り（現在の大手町通り）は南北方向に天守を見通して設定されている。[2] この軸を図上計測すると約18度時計回りに振れている。この振れ角の理由については定かではないが、天守から基軸の延長線上には海上に浮かぶ安芸の小富士をやや左に見る方角となっている。また、太田川と京橋川に囲まれた地形的制約の中に碁盤目状の町割を納めるには適した方角であったためと推測される。

また、当時城の北側を通っていた西国街道を福島政則が城下町に引き入れることによって東西軸ができるとともに町人町が拡大し、現在の中心商店街である本通りが形成された。これによって広島城下町は城の正面に向かう縦町型から横町型の都市へと移行したといわれている。[3]

b）城下町の街割

町割りは京都を、部分的には大阪を範としたと言われている。街区の大きさは一町四方或いは一町と半町の長方形の街区が碁盤目状に配置されている。武家地の屋敷割は城郭北の白島から東の幟町方面へと配置され、上級武家程城郭に近く位置した。町人地は城郭の南側の特に西国街道沿いに集積した。寺院は城郭西北部の寺町や、西国街道筋の東西要所にも配されていた。城下町時代の人口は正徳5年時点で推定68,261人とされている。この内訳は武家が27%の18,720人、寺社が少なく2%の1,190人、町組が最も多く54.5%の37,155人、その他新開組等で1は6.5%の11,166人となっている。

築城から明治に至るまでの約300年間広島の城郭は機能し続けたことから、この時代の城郭内については一般の町人等からは閉鎖された空間として位置づけられる。

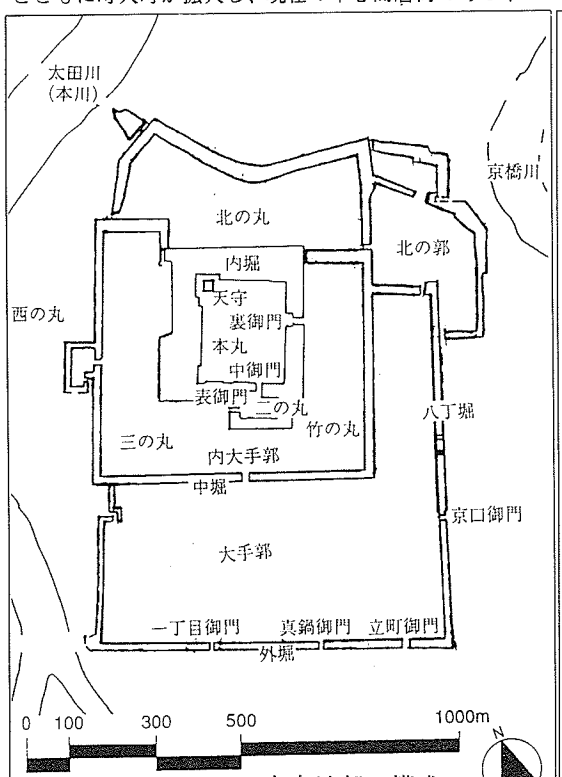

図２－１　広島城郭の構成

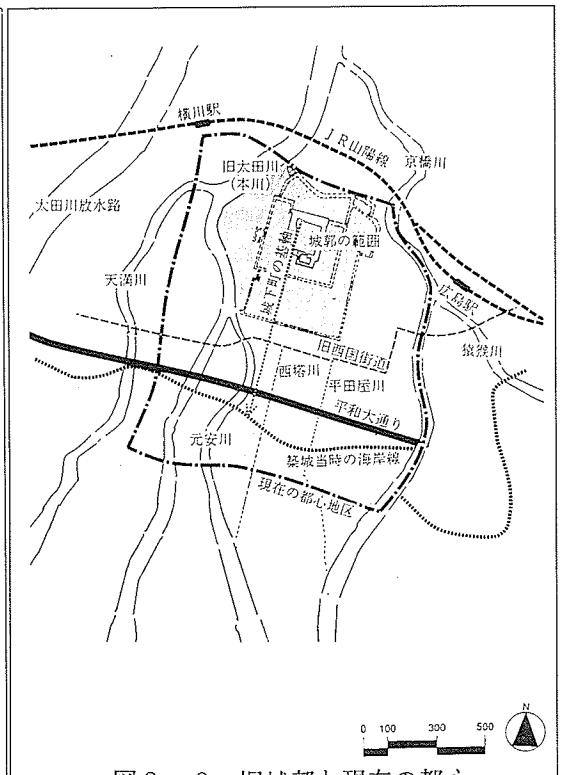

図２－２　旧城郭と現在の都心

3．明治以降、終戦までの空間構造の変遷

(1) 城郭内軍用施設の配置と近代化

1868年（明治元）年の明治維新後、広大な敷地を有していた城郭内外の構造が変化していくが、以下にその概略を記す。

広島は武家による封建社会の崩壊後、城下町の形態から1873(明治6)年1月、鎮台が置かれ、第五軍管轄広島鎮台と称されたように軍部によって城郭が支配される時代を迎える。行政上は1872(明治5)年に第1大区、1888(明治21)年に広島区を経て、1889(明治22)年4月広島市として市制施行され、当時の人口は83,387人であった。本来市の中枢機能である市役所は城郭を軍部が領有していたため城郭外の南西に同年9月中島新町に開庁された。旧城郭内では日清戦争の勃発によって大本営が1894(明治27)年9月から翌年4月までの間設置されるなど広大な敷地内は軍事色の濃い利用となったが当初は空地的な空間が広い面積を占めた。

城下町時代には城防備上の観点から架橋制限がなされ、西国街道沿いにしか架橋されていなかった河川に相次いで架橋されて行くこととなった。1894(明治27)年6月に開通した山陽鉄道(糸崎・広島間)は中心部の北側を通り、市街地東側の京橋川を渡った左岸に広島駅が設置された。1911(明治44)年までに外堀が埋められ、また、西塔川も1912(大正元)年までに埋め立て、道路化して一部に路面電車が開通した。城郭周辺では南の外堀のあった相生通りや東の八丁堀跡沿いに敷設され、この内側一区画分は早期に民化された。しかし城郭内の3重の堀割を境界とした土地利用は戦時期まで概ね踏襲されていたと見られる。本丸には大本営や題第5師団司令部等の中枢機能、最も広い面積をもつ南側の旧大手郭には西練兵場が設けられた。

(2) 戦前の都市計画

戦前の広島の都市計画は1928(昭和3)年の旧市域で29路線が決定されたのが最初である。1930(昭和5)年から事業着手され、戦争により中断した。この計画では城郭内部を貫通するものはなく、まだ城郭を一体として不可侵の領域として位置づけられていたものと見られる。しかし城郭周辺を囲むように計画がなされており、南側で外堀から旧西塔川に沿って南下する紙屋町・国泰寺線、外堀に沿って東西方向の十日町・荒神町線、東の流川・牛田線、北側を東西に走る荒神町・大須線等である。

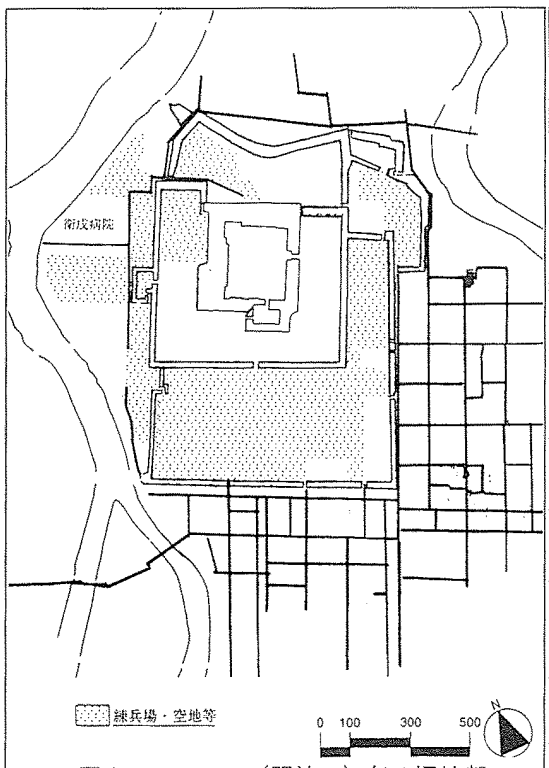

図３－１　1894（明治27）年の旧城郭

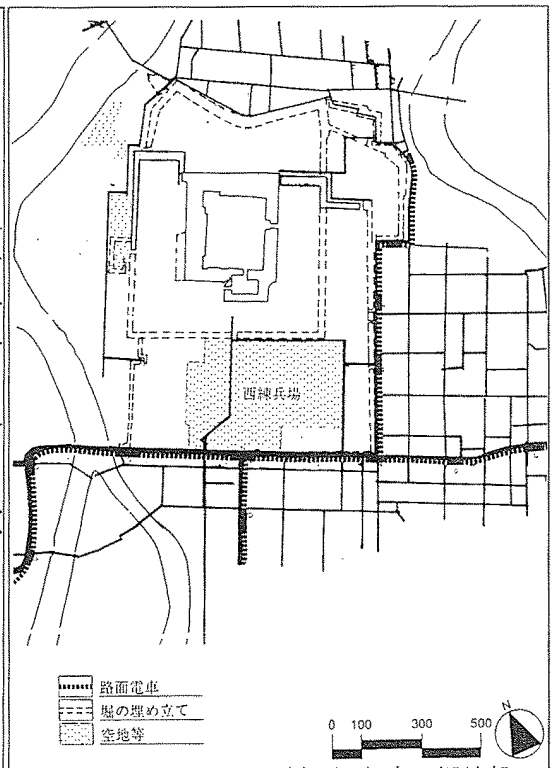

図３－２　1925（大正14）年の旧城郭

4．戦後の空間構造の変遷

1945(昭和20)年8月の原爆投下により、戦災による被害は他に類を見ないものとなった。城郭周辺は爆心地から半径1km以内の直近であったために全壊地域となった。

(1) 戦災復興事業

戦災で消滅した広島都心部の戦後の復興は、原爆によって破壊された都市施設の復旧を行うと共に、戦前に果たし得なかった事業については戦災復興都市計画として再構築し、新しい事業として実施することになった。戦災復興都市計画の最も大きな特徴は市中心部ではそれまで実施されたことのなかった土地区画整理を採用し、市街地の抜本的な整備を図ったことである。

a）復興都市計画街路

復興都市計画街路は、1946(昭和21)年10月に計画決定され、24路線、延長82kmに及ぶ。幅員は主要幹線が36～40m、通常幹線が20～30mである。広路-1の比治山庚午線（平和大通り）が100m道路となっているが、全体的に碁盤目状の構成を成している。

この計画で初めて旧城郭を貫通する道路が計画された。東西方向に内堀の南面を通過する中広・宇品線(36m)、内堀の表御門から南伸する紙屋町・御幸橋線(鯉城通り,40m)相生橋・白島線(20m,未開通)である。また城郭周辺道路は戦前の計画と同様に強化され、東西に天満・矢賀線(相生通り,40m)、駅前・観音線(城北通,30m)、南北に御幸橋・三篠線(30m)が計画された。

これらによって城旧城郭周辺、都心部の骨格街路が強化されたばかりでなく、特に城郭を望む正面の概念が戦前城郭の外堀部分から内堀部分にまで奥まったと考えられる。

b）復興都市計画公園

復興都市計画公園は、1946(昭和21)年11月に計画決定され、大公園3箇所・小公園32箇所、河岸緑地計画は1952(昭和27)年都市計画決定された。旧城郭内の地に市の公園緑地系統の要として位置づけられた中央公園は最も広い大公園(約70.48ha)として計画決定された。中央公園の整備は1949(昭和24)年国から旧軍用地の貸付を受けて着工され事業が進められたが、当初は1958(昭和33)年天守が鉄筋ｺﾝｸﾘｰﾄによって復元や市民球場・県立体育館等の体育施設の整備が中心であった。1967(昭和42)年の明治百年公園事業としては城跡の復旧等が行われた。公園西側の芝生広場等の用地確保は後述する基町再開発事業との関連が深く、戦後の応急住宅用地を公園・河岸緑地に転換するために公園整備が進められ、1983(昭和58)年中央公園は42haに縮小されて一応の完成を見た。また中央公園全体には当初約200m四方の方形の区画によって構成されていたことが分かる。

(2) 旧城郭内の空間構造の変遷

a）官庁施設の集中

終戦とともに1945(昭和20)年軍用地は全て国有地と

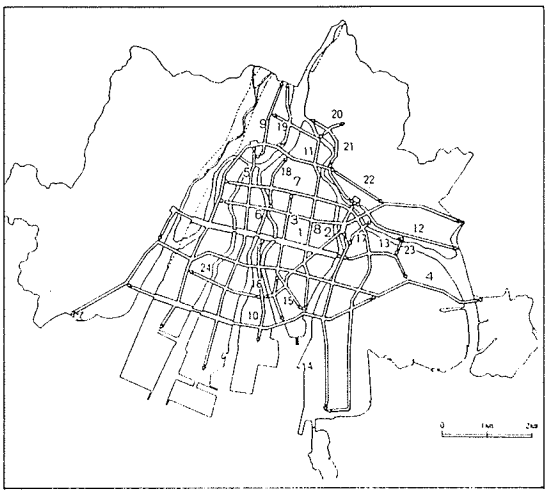

図４－１　復興都市計画街路[4]

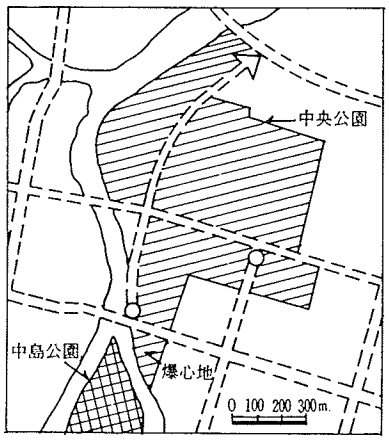

図４－２　当初の中央公園計画[5]

して国が管理するところとなったが、広島市は基町の東半分を官公庁施設に、西半分を公園用地にする計画を立てた。官公庁施設は旧城郭内の旧軍用地に県庁・高等裁判所・合同庁舎・電電関係・法務関係等が集中して移転立地した。これは西練兵場という訓練施設ながらも広大であった空地がいくつかの街区に区分され、空地が相当量消滅している。後に出来る中央公園の芝生広場・自由広場に相当する面積を有していた。また鯉城通りの建設によって、内堀部分から都市軸としての正面性がつくられたといえる。

b）住宅の問題

被災市民は住むところを求め、旧西の丸にあたる城の西側部分を中心に応急住宅対策として越冬用簡易住宅・組立住宅・国庫補助庶民住宅・木造仮設住宅等が立地していった。また相生橋から三篠橋の東部に至る土手沿いに延長約1.5km、員約2～3mの細長くﾊﾞﾗｯｸの不法住宅が形成され1960(昭和35)年頃には約900戸が立ち並び、1963(昭和38)年頃「原爆ｽﾗﾑ」と呼ばれるようになった。

b）－1　公営住宅建て替え事業

住宅問題への対応として、まず老朽化した公的木造住宅約1,815戸の建て替えと地区の整備が必要となった。この地区は1952(昭和27)年に中央公園として都市計画決定していたためにこれを一部割愛、1956(昭和31)年公園用地のうち、13.25haを「一団地の住宅経営」地区として計画変更し、中層住宅団地を建設することによって老朽化住宅の解消と公園予定地の公園化整備を目指した計画が策定された。1956(昭和31)年に着工した住宅建設は、1968(昭和43)年度までに930戸（市営630戸、県営300戸)が完成した。しかし、民間を含めた全地域の不良住宅解消は不可能であり、依然として相生通り沿いに無数のﾊﾞﾗｯｸ住宅が立ち並んでいた。この結果、他地域の戦災復興が進むにつれて、対象的にこの地区の整備の遅れが目立ち、抜本的な対策を立てる必要に迫られた。

b）－2　基町地区再開発事業

1968(昭和43)年発足した基町地区再開発促進協議会は、単なる不良住宅の除却に留まらず、戦災復興事業に終始符を打つとともに、更に発展する広島の将来を展望する新しい街づくりという構想の下に計画を推進した。この結果改良地区指定、事業認可を受けて事業

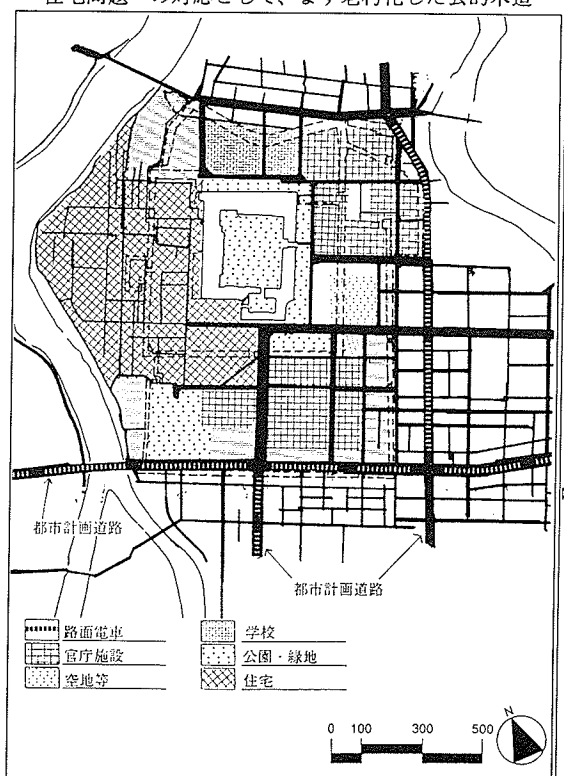

図４－３　1955（昭和30）年の旧城郭

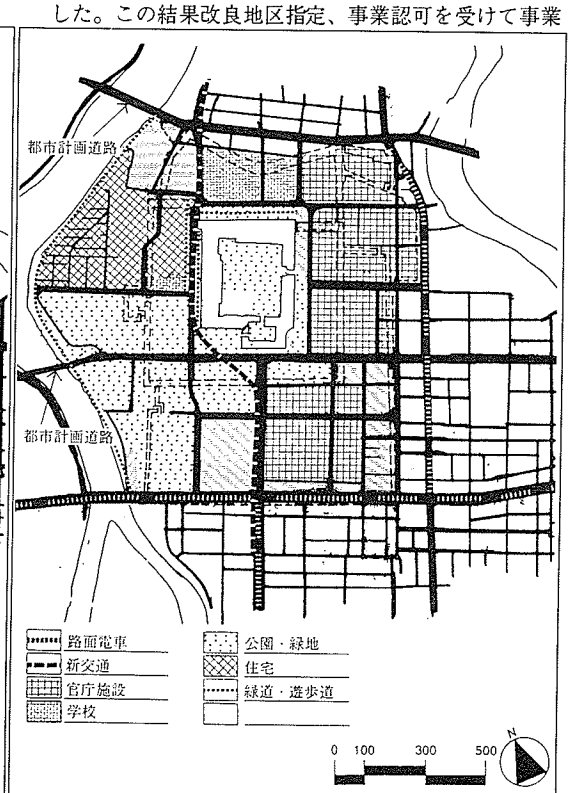

図４－４　現在の旧城郭

が実施された。1969(昭和44)年3月、改良地区指定が遅れたため、公営住宅建て替え事業として220戸に着手。1969(昭和44)年度に基町地区で改良住宅、長寿園住宅で改良、公営住宅建設に着手され、1978(昭和53)年9月末に全ての工事が完了した。

c）基町堤防の整備

基町堤防は、広島城及び城下町を水害から守ると共に戦略的な地域防備のうえから、1617(元和3）年の大洪水を契機として、福島正則が小姓組の二宮平八郎の進言によってここ基町に新しく堤防を作ったことに始まる。建設省は1977(昭和52)年に従来からあった堤防を利用し、護岸整備にも配慮した整備工事に着手し1983(昭和58)年10月治水機能と河岸緑地公園をあわせもった現在の基町堤防が完成した。また、戦前から着手され、1965(昭和40)年に完成した太田川放水路は、太田川の7つに支流でたびたび起きていた洪水を解消させるのに寄与し、このような護岸整備が可能となったと考えられる。

5．城郭内の施設配置と天守の位置づけ

戦後の旧城郭内における新旧の施設配置と位置づけについて若干の考察を以下に行った。

(1) 住宅の施設配置

昭和30年代に計画された中層住宅建替事業の際の建物配置については当初案で既に東西に方向に公園と住宅を画する案ができていることが分かる。建替計画はは住民反対をうけながら当初案の天守側の範囲を削って河岸よりに建設されており、城への配慮がなされたのではないかと推測される。しかしながら結果として基町地区再開発事業において収容戸数の必要性から天守の直近で高層住宅となったために内堀側の住棟が天守を見おろす形となっている。尤も基町地区再開発事業による市営高層アパートの建設が実施されたことによ

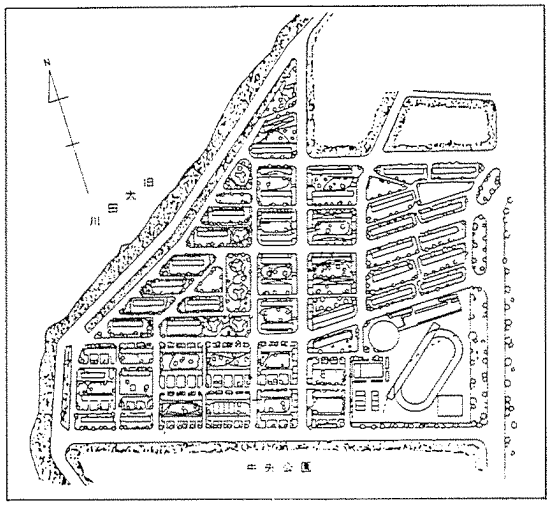

図５－１　基町中層住宅建替計画図[4]

ってようやく中央公園の広場部分が確保されているので土地利用と施設配置の時期的な差異によって生じた結果とも考えられる。

(2) 広島城天守の可視領域

現在広島都心周辺で高さ20階以上の建築物は少ないが、城郭内外の建物は戦後建設されたものが殆どであるため、城を取り囲む形で比較的高層の施設立地が進行している。天守の高さは、約35mで、これと同等或いは上回る高さの建築物は、高さ65mの高層アパートや、平成1990(平成2)年に基町高次都市機能集積地区計画によって建設された高層ビルなどがある。

現在地上レベルから天守を見ることができる可視領域は図５－３のようになっており、中央公園の広場方向を除き内堀より遠く、半径約300mから見ることは殆どできないできない状況である。

城下町時代には都市の象徴としてまた中心として捉えられてきた天守は、戦後復原されたものであるが、周辺施設の高層化の影響もあって象徴的なランドマークとしての位置付けが低下してきていると言える。

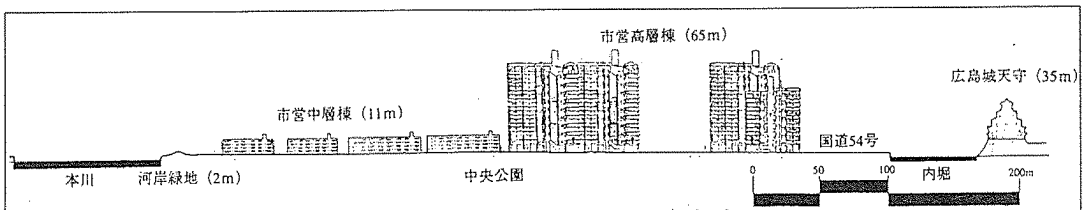

図５－２　南側から見た現在の旧城郭立面図

図5－3　広島城天守の可視領域[4]
(広島市建物階数別現況図を加工)

6．結語

都市形成発祥の地としての広島城城郭築城以来の空間構造の変遷について検討してきたが、これらをまとめると以下のようになる。

(1) 城郭の骨格の解体による空間構造の変化

城郭の外堀はその必要性がなくなったために明治期を中心に埋め立てられたが、次のような役割を果たした。

a．骨格交通網への寄与

明治期に埋め立てられた堀割りは城郭外においては幹線道路や路面電車の開通など骨格的な都市交通網の強化に転用された。

b．城郭縁辺部の土地利用の編入

外堀が道路化し、沿道両側が結ばれたことにより、城郭内側の土地が、商業などの民有施設へと変化していくことになった。

c．土地利用の多様性の創出

城下町時代の城郭土地利用は防御の意味と城主・家臣の居住地として比較的細かい区分であったが、明治期から終戦までは、軍用地として比較的大規模な土地利用、空地的な土地利用がなされた。これが、戦後の様々な土地利用の可能性を創出することが可能になった要因となった。

(2) 城郭内外の位置づけの変化

都市の発祥から城下町時代、或いは終戦までの長年に渡り、城郭内部は立入ができない都市の奥地として位置づけられてきたが以下のような変化が見られる。

a）城郭の象徴性の低下

戦後から現在に至るまでの天守への可視領域が極端に狭まったことや、周辺の多様なシンボル的な施設の立地によって城郭が元来有していた象徴性が低下してきている。

b）城郭の規模の縮小

戦後の城郭内を貫通する復興街路などにより、城郭として感じとられる規模が従来の外堀を境界としていたものが失われ、内堀を境界として意識されるようになった。特に鯉城通りとこれに直交する道路は新しい城郭の境界を創出したと言える。

最後に総体として考察される事柄は、約1ｋｍ四方のまとまりを有し、一般には立ち入れなかった空間が徐々に多様な人の流れを導入していく空間へと変貌しつつあると考えられる。

謝辞

本研究は日本の都市形成史、特に都市の発祥地・都心部に関する研究の一環として、中国地方の旧城下町都市であり今日の政令指定都市である広島市を題材に検討を進めたものである。対象地域を研究することになった動機の一つに平成7年度広島市の委託業務「基町住宅団地総合再生のための検討調査」があり、お世話になった委員の方並びに関係機関である広島市都市整備局住宅計画課、（財）国土開発技術研究センター、（株）現代計画研究所の関係者各位に深く感謝する次第である。尚、本論文の執筆に当たっては、業務の一環として資料収集・検討した内容も含まれているが、筆者の研究視点でまとめた。

参考文献

1）広島市歴史科学教育事業団編:『広島城天守閣総合案内』,広島市歴史科学教育事業団,pp.23,1995年

2）藤岡兼二郎:『地形図に歴史を読む第4集』,大明堂,pp.56,1972年

3）高橋康夫他:『図集日本都市史』,東京大学出版会,,1993年

4）広島市他編:『戦災復興事業史』,広島市, pp.39,pp.304,1995

5）広島市編:『広島新史－都市文化編』,広島市,,1983

6）広島市編:『広島新史－地理編』,広島市,,983

7）広島市編:『広島新史－市民生活編』,広島市,,983年

8）広島市編:『広島新史－資料編』,広島市,,

9）広島市編:『図説広島市史』,広島市,,1989年

10)広島都市交通問題懇談会編:『広島の都市交通の現況と将来』,大蔵省印刷局,,1971年